二葉亭四迷原稿

平凡

一

14
4401
1

大正十四年十一月十一日寄
澁川柳二郎氏贈

へ14
4401
1
特

昭和文庫

平化（二）

二葉亭

私は今年三十九になる。人世五十が通相場だとすれば、今日日は次へ入らうとも思はぬが、未だ未来は長いやうでも短かいも

た。

過去つてゝは實に糸氣ない。ま

だしと云つてる中に、いつの間か此世

の陰が明いて、もうおさらばといふ時節が來る。

其時に成つて後ら後悔いさつて藻掻いさつて

追付かない。覺悟をするなら今の中だ。

十ノ廿 松屋刊

別行

いや、惜しかし私も死ぬんだ。

死ぬには

死ぬみやうが早過ぎるといふ人も有ら

うが、氣の持方は年寄りも死ぬと方が好い。

そんなどと無駄を言ふ。

何して此頃も死人じみと心持にでなた

心のか知らぬが、絶ち芸学をして来た所為
ではあるまい。
私の仕事の芸学は誰
でもしてゐる。尤も芸学しても一向芸学に
なりつきぬ。
次げぬ仕事も、元気な人もある。或は芸学
が上手になりをして心に浸みふ仕事も元気の

失せぬお坊さん欲の人もあるが、大抵は皆
私のやうに芸学に負げて年よりは老込んで、
いくぢ
意久地なく所帯染みてゐひ、後所の帰りに
蛙を二切位の皮を包む揚げて来る気になな
る。
それが普通ごと、まあ、思うて自ら慰

めてゐる。

もう朝うすらと赤色が見え渡く。もうゆ

何なに孤に藻搔いたとて駄目だと思ふ。強盗と

思はぬではないが、思うとて仕方がない。

それらは其隣で内職の俵詰の一枚も仕計

にして、もう、これ、矢が近いから、家内

中に袋入れの一枚も引張らふ。

。

もう私は大し欲しくない。どうか俥か中

学を卒業する色色前度よく節かを

（せら茶沒をる）

（後方を）

（其色に）

小

注意!!
ミは三ッに限る

金の少しも溜まって、いつ何時(なんどき)になっても何時(いつ)なまが
あ
ゐって、妻子が路頭に迷はぬ程にして置
と思ふだけだ
きといしが、そ小が暴(ぼく)して出来(でき)ものやら、
出来ぬもの
仲(なか)やら、まじ(たなば)出来(でき)ないので、心細(こころぼそ)いこ
が、考(かんが)へると、昔(むかし)は動(か)うではなかった。

平仮名（二）

二葉亭

おこ　ようこ

老ひんだ登場人は、近頃は少し暇だと直す

くわこ　がんだ　かんひだ

ぐ過去を憶出す。いや、憶出しても一向憶

だ　ばえ　くわこ　かう　おもひだ

出し栄のせぬ過去だ、何一つ他出来ま

せ

ぢやな
ない、どころ[illegible]い、皆[illegible]でもない事ばかり
だ。が、それ
[illegible]
[illegible]煩悩でみて、其失敗の過去が、私
耳つ
に
てはイロ[illegible]かゝ[illegible]しい處がある、後悔懺悔
腸を断つ想が有りながら、何となく心を惹
それでみて
つ
けられる。

平凡（三）

二　葬式

私は地方生れだ。戸籍を並べて仕方がないから、唯某縣の某市として置くが其處で生れて、其處で育つたのだ。

子供の時分の事は殆んど大抵忘れてしまつたが、
不思議なもので、
まづ覚えてゐる事では、生長してから世に
拠はれる事もあるの。中にも果ばかりは一生
不変に、敬ゝ聞かされた話を覚えてゐ
る。目の底に染付いて忘れられまいと思ふのは、
るのかも知れと思ふ事実を覚えてゐるのか
十の時に死別れし祖母の面だ。
胡乱ながら其中で最も一つ

正真正銘の無い事物を目の底に留めてゐて、
一生忘れまいと思ふのは、九ツ位か十だか
四時に死別れた祖母の面だ。
今でも目を瞑ると、直ぐ顕然と目の前に
浮ぶ、面長の、尤人だから無論鍾は寄つ

てゐたが、締つたはえで、段鼻で、なか〳〵
上品な面相だつたが、眼が大きい。
女には後過ぎた。古屋の一こ
れが彩す家の妻だ。一古屋の陰左の眼と
いつたら、随分評判の眼だつた

さうだが、成程然らうい〳〵ば、何か氣に入らぬ事が有つて祖母が[illegible]の空に伸んで白眼でぢろりと睨む眼と、子供心にも何だか無氣味だつたやうな覚がまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云ふ。

が矢張り其だつた。全く眼色のやうな氣象で、勝氣で、鋭くて、強く何かに氣のはく、はしハイチキハイといふ、一口に言へば男勝りゝまあ、さういつた型の人だつたさうな、――私は子供の事で一向夢中どつたが。

生長後親戚などの話で聞くと、それといふが幾分か境遇の然らしめた所も有つたらしい――そういふのは、早く祖父に死れて若い時から後家を徹して来た。後家といふ者はりちの世でも気角人に負ぬ口言は人勝の、割の

悪いものだから、勝気の祖母は、これが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と気を張る。気を張って油断をしなかつたのから、一生人に後指を差されるやうな過失はなかつた代り、餘り人に愛しもされず

十ノ巻　新聞記者

別行

に身を取つて、父の代となつた。

父は祖母とは全く違つてゐた。如何して此人の腹に此様な人がと怪しまれる程の好人物で、面も薩張似てゐなかつた。中背の大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、如何にも愛敬の豊頬しい

面顔

ある兵隊で、

元大柄らったが、何歳か四

味が有り、心も其通り角が無かった。快

活で、場りがよくて、話が好きで、碁が好

きで、暇さへあれば近處をあちこち歩き、大き

な嘘を自慢にする程の罪のない人だった。

祖父が矢張り然うであったと云ふから、大

方其気象を受継いだのであらう。

父は此様な人だし、母は一杯の子供の

世話の世は、手拭を姉様冠りにして襷掛け

で働く人だった。其頃の事

を能に聞いても、皆阿母さんは能く辛抱な
すつたとばかりで、其他に何し言はぬから、
私の記憶に殘る其時分の母は、何日迄經つ
ても矢張り手拭を姉被りにして働き通し
能く人で、格別かい人と

いふ事を知らない。
新しいふ家庭だつたから、自然祖母が一
家の實權を握つてゐた。家内の事は一から
十迄皆祖母の方寸に捌かれて、母は下女の
様に追使はれた。父は一向家事には関

係しない。で、形式的に相談を掛けて、ようがせう、と言ってみる。さう言ってみないと、祖母の姪嬢が悪い。面倒だ。

母方の伯父で、在方で材木をしてゐる人があると。何しろものじゃ、祖母とは仲

悪で、死後迄仲よくはゆかなつたが、

何かの話の序に、阿母さんもお祖母さんに

は随分泣かされたものだよ、と私に言つた事がある。成程祖母が物蔭で泣いてゐる

と、うちも気の毒なりが其時ばかりは困つた

顔をして何か密々言つてゐるのを、子供心に不審に思つたことがあつたが、大方それが伯父の婿ふる祖母さんに注がされてゐるのだつとかに知れぬ。

更に角祖母は此通り氣難かし家であつたが、その氣難かし家の、たんと後迄噂に殘る程の祖母が、如何にも物に怖じる様に怖る

と、から老人地獄がなかつた。

平凡（四）

二葉亭

何で世間が私に掛ると、意久地が無くなるのだか、其は私には分らなかった。が、兎に角意久地の無くなるのは事實で、評判

の氣遣かし家が、如何にでも私の思ふ様に
なりてゐる。
まづ何ぞ欲しい物がある。それも無い物
ねだりで、有る結構な干菓子は勿論で、無い
一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強

ぐるが、許されない。祖母に強ねる、一寸
ぶ
泣く、首玉へ喰り付いて、ようしと二三
度鼻先で甘垂れる、と、もう祖母は海鼠の
様になりて、お由——母の名だ——彼に
言ふしんだから、買つて来てお遣りよ、と

いふ。祖母の顔掛りじめから、母も不愉快な
起つて、雨降りでも、私の口のお使に
番傘傾げて出懸けやうとする。斯うすると、
流石の父も笑つてばかりは居られなく
なつて、小言をいふ。私が泣く、祖母の機嫌
が悪い。

「此様小さい者を苛めて言て、若し
しか仮坊の様な事にでもなつたら、如何
しだ？　可哀さうぢやないか。」
もいふのが口切で、ポツリ〳〵と始める。

後妨といふのは私の兄で、私も虚弱じつたが、矢張虚弱で、云ツの時倒られたのださうだ。それも急性胃加答児で倒られたのだと云ふから、事に寄ると、祖母が可愛がりごかしに口を慎ませなかつた業かも知れぬ。

保し虚弱な児は大体させ付ると達者になると言はれて、成程然うかなと思ふ程の父どから、祖母の家庭には氣が附かない。矢張有弱れた然う我儘をさせばけてば信の所で切脱けやうとする。祖母も其は然う思はぬ

でもないから、一内心自分が無理だと思ふ[illegible]ごけに激

すると、言葉が荒くなる。もう此上憤らせる

と、又三日も物を言はずつと黙り、ゆい

と家を出て在の親類へ行つと切帰らぬと

いふ騒もとりかねまじい景色なので、父は

黙つてゐる。母も黙つて出て行く。と、も

う二十分も経つと、私が両手に豆を持つ

て雀躍して喜ぶ顔を、旦母が眺めてゐる

すると事にならつてゐる。

然うして私の小さい[illegible]際限の無い怨が、

毎日祖母を悪して遂げられる。それは子供ごろ うすしのみこ心に薄々解めるから、自然家内中で私の一番好きなのは祖母で、お祖母さんと跡を慕ふ。何となく祖母を味方のやうに思つてゐるから、祖母が内に居る時は、私は散々我儘を言つて、怒たれて、仕度三昧を仕放らすが、留守だと、萎靡るのではないが、保程温順しくなる。

其癖私は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奥底が見透されるから、祖母が何と言

つこつて、些とも可怕くない。

それを又勝氣の祖母が何とも思つてゐな

いの及て馬鹿にされるのが癪しいやうに、

人が来ると、其話をして、憎い奴でござい

ますと言つて、ほくしてゐる。

七

両親も其は同じ事で、散々私に悩まされ

ながら、矢張何とも思つてゐない。唯気で

お祖母さんにも困ると、お祖母さんの暴癖

を零すばかり。

私は何方へ廻つても、矢張好い児だ。

平凡（五）

二葉亭

やはり親馬鹿と一口に言ふけれど、親の馬鹿程ありがたもの迷惑な物はない。祖母は勿論、両親とても決して馬鹿ではないつもりだが、その馬鹿でな

かつと人達が、私のために馬鹿になつて呉れた。

勿論ない（と言はずにはられない。

宝の山に入り乍ら空手で帰る。）

私に何の取得がある？　親身の油を絞つて搾た金を、私の教育に惜気もなく掛けて呉れるのは、

天晴れ一人前の男に仕立てたいが為であつたらうけれど、私は今

助たる腰弁当で、浮世の片隅に潜むのである。

私が生きてゐたとて、世に寸益もなければ、

死んだとて、妻子の外に損を受ける者もない。

世間から見れば、居つても無くても好い

保険な人間だ。財産なり、學問なり、投資なり、何か人より優れてゐる人は、あの程度に持つてゐる物を捨てゝ、傲然として空嘯いてゐるし、人は皆其足下に平伏する。私のやうに何も無い者は、生活に疲れて路傍に倒れて居ても、誰一人振向いて見ても呉れない。皆素通りして勿々と行つてしまふ。偶〻立止る者が有るかと思へば、熱くなつて、金持ならう、うゝ、貧乏人だと云ふ、學者ならう、うゝ、無學な奴だと云ふ、詩人

なら、う、、俗物だと云ふ、而して匆々と
行つてしまふ。平生たも親しらしい面をして
親友とか何とか云つてゐる人達でも、斯うなると
冷つて集つて、仲間を捨てて手ンに
手ンに山の未練を捨てゝ出しても、を

れで君は行からうとんだ、自業自得だ、△
△諦め玉へ〜〜と講釋
三度四度向して
彼方向いて
匆々と行つてしまふ。私は新ういふ價値の無
い平凡な人間だ。それをこつとない寶のや
うに、人に後指を差されても愛して呉れ

たのは、生れて以来今日まで何萬人となく
出会つた。人に
けれど、其中で
唯祖母と父母とあるば
かりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言
つて擯斥されるけれど、平凡な私の身に取
つては是程尊い生活はない。

若し親達に所謂教育が有つたら、新
うはなかつたらう。必ず、動物的の愛なん
何處か
ぞは拂拭の隅に撒き散らして置き、
例の
靈性の愛とかいふものを擡げ出して来て、
天から
薄氣味の悪い上眼を遣つて、

拾無

曖昧な

た理想の玉を眺めながら、

親の権威を笠に被ぬ面をして笠に被て、

其處ン處は体裁よく私を或型へ推込まうと

企らひだらう。私は子供の天性の儘に、そ

んなふやけた人間が、古本やんぞと首ろし

て、道楽半分に拵らへた、其癖無暗に窮屈

な型かんぞへ入る事を拒むで、隙を見て逃

出さうとする。むッこいと取捉まへて、厭

がる者を無理無体に、シャモを鶏籠へ推込

むやうに推込む。私は型の中で出やうと藻

捲く。知らん面してゐる。泣いて、喚いて、
引捲いて出やうとする。知らん面してゐる。
欺して出やうとする。其手に乗らない。百
計盡きて、仕方がないと観念して、性を矯
め、情を矯め、生ながら木偶の様な生氣の

ない人間にさうてゝ考へば、刹達は始て満足
して、潔く善良な仏向が見えて来たと曰ふ。
世間の所謂家庭教育といふものは皆是では
ないか。私は幸にして刹達が無教育無理想
でちつとばかりに、型に推込まれる憂目を

が
免れて、野育ちに育つた。野育ちだから、
生来具眼の百の缺點を暗面もなく暴け出し
て、所謂教育ある人達を鼻感せしめたけれ
ど、其代り子供の時分は、今の様に矯飾は
しなかつた。皆無教育な親達のお蔭だ。な
ぜ
雖い事だと思ふ。
真に難い事だと思ふ。
志かし内輝かりの外突まりと昔から多く似
人が云ふ。
人の深遠な道理よりも、詣
人の微底した見識よりも、平凡な所共の平
には此六が入り易い。不思議な事には、無

理想の俗人の言ふ事は皆浅きと聞えるら。

私が矢張その内腐がりの外窠まりであつた。

平凡（六）

二葉亭

内ン中の鮑ッ貝、外へ出りゃ蜆ッ貝、と

友達に嘲されて、私は悔しがつて能く泣いたッけが、保し全く其通りであつた。

仏いふものだか、内でお祖母さんが舐
るやうにして可愛がつて呉れるが、一向嬉
しくない。久て茶幌くなつて、出らな
と刺めら袖の下を潜つて外へ出す。
志かし一歩門外へ出れば、最う浮世の苦

い風が吹く。子供の時分の苦は、何處にも
有る筈の事といふ奴だ。私の近處に心共
が居た。
勘ちやんと云つて、私より二ツ三ツ年上
で、獅子ッ鼻の、色の真黒けな児だつたが、

恐ういふのに陥つて乱暴ど。親仁は勝手の配達か何かで、大酒で、阿母はおろ習を

と来てみるから、常々鍵裂ごうけの着物を

着て、踵の切れた冷飯草履を突掛け、片手

に食糧徳利を提げ、子供の癖に尾な流行

歌を大声に唱ひながら、飛んごり、跳ねたり、

曲駄といふのを遣り使に

行く。

紙使にばかり行つても厭なかつた

らうが、私は勤ちやんの事を憐ぶすと、何

故か常々共使に行く姿を想ぶす。

勘ちゃんは家では何も貰へぬから、人が何か持つてさへあれば、屹度欲しがつて、卒直にお呉れなと云ふ。機嫌好く貰へば好い、厭だと頭振を振ると、顔を突出して、思ひ切り悪くやうやうて貰らうとするが、容易くは受取らない。好いよ、呉れないと云つとね、好いよと、其詐りを反覆して行つてるふ。行となく気にするが、子供の事ど、遊びに耽けて忘かてゐると、行時の間にか勘ちゃんが、使の帰りに行處

でか蛇の死んだのを拾つて来て、窓と背後から忍寄つて、幸蔵ピシヤリと叩付けた。

ワツと泣出す、此方は逃出す、その後姿を勘ちやんは白眼で目送つて、「様ァ見やがれ！」

十八

私は教々此勘ちやんに苦められた。彼こを悔しがつて武者振り付いて見たが、勘ちやんは喧嘩の名人だ。直と足掛掛けて推倒して置いて、馬乗りに乗つてピシヤ〳〵打つ。私にはお祖母さんが付いてるから、

内では親にさへ滅多におしゃれた事のない頭だ。その大切にせられてゐる頭を、勘ちゃんは遠慮せずにぴしゃ〳〵おつ。

一度酷い目に遭ってから、私は勘ちゃんが可怕くて〳〵ならなくなった。勘ちゃん

が側へ来ると、最う私は怕くして、呉れと言はない中から持ってる物を遣り、勘ちゃん、あの、賢ちゃんがね、前の事を泥棒じゃって言ってたよと、餘計な事迄告口して、勉強御褒美をくれってゐると。黙らしてゐれば

大抵は無言じが、それでも時々何の理由も
なく通りすがりの大切の頭をコツリと殴つて行くこともある。
外は面白いが、勘ちやんが厭だ。と云つて、内でお祖母さんと眼めつこも許らない。

そこで、お隣のお光ちやんにお向ふのお芳ちやんを呼んで来る。お光ちやんは外遊のお出額で河童のやうな児じけれど、お芳ちやんは色白の、鉄を張つこやうな眼で、好児じ。私は仮妻でお芳ちやんの旦那に

するのが大好きだった。お畑草盆のお芳ちゃんが
真面目顔って、貴方、御役をお上ンなさい
なと云ふ。アイと私が返事をする。アイぢ
や可笑いわ、ウンといふンどわ、と教へら
て、だやウンと言って、可笑くさうて、不

笑ひ出す。此方が勘ちゃんに頭を打られ
るより係程面白い。それに女の児はこまえ
やくれてゐるから、子供でも人の家じと
遠慮する。私一人威張ってゐられる。
別違って喧嘩にならうとも、此度歌手が泣く。

別行

些うすかぼお祖母さんが泳ぎて来れる。

女の児と遊ぶのは無難で面白いが、

併しさう毎日も遊びに来て呉れない。すると、私は退屈するから、平地に波瀾を起して、拗ねて、

だぶくツて、大泣に泣いて、而してお祖母

さんに御機嫌をくつて貰ふ。

注意!!
…は三ツに限る

平凡（七）

二葉亭

…が、待てよ。何ぼ自然主義ごと云って、

如何

如何ダウしと書いてみた日には、三十九年の半生を送るに、三十九年掛るかも知れ

七

ない。もすこし考へらう。

で、確実ながら、祖母は病気らしい。

其時の事は今に覚えてゐるが、平常の様子と

で仔細なく外から帰つて見ると、母が妙な顔して奥から出て来て、常になく小聲で、

お前は、まあ、何度へ行つてゐるの？

お祖母さんがお亡なンなすつたよ、といふ。

お亡なンなすつたよが一寸分らなかつたが、

死んだのと同時に、急に何だか可怕くなつて

無論泣くと

来た。まだ死ぬといふ事が何なる事だか

くはわら
生ハ[illegible]ハ[illegible]ですから、唯何となく恐ら
眞暗な
暗い行止りの知れぬ穴のやうな處へ入る事
のやうに思はれて、日頃から[illegible]味悪しく
可怕かつて
のだが、子供も人間だから亦宿を免れない。
お祖母さんが死んだ[illegible]のは
可怕いが、

三

注意!!
ここは!!

その可怕い處を
見たやうな気もする。
で、母が来いと云ふから、後に随いて怕
未だ戻る
怕奥へ行つて見ると、父は潜者と何か話を
してゐしが、私の面を見るより、何處へ行
つて戻と。もう一足早かつたらなあ……と、

何どか甚く殘念がりて、此處へ來てお祖母さんにお辭儀しろといふ。

お祖母さんにお辭儀しろと言はれし事は滅多に無いので、もしかすると言ふ事をするものだと思つて、おつかなびくり側へ行くと、小弁

注意!!

三ページ

風を逆にした様に祖母が寢てゐて、面に白い布片が掛けてある。父が傍から其を取除けると、眼を閉じて少し口を開いて眠つたやうな祖母の面が見える…一目見

一なれ

ると、厭な色じと思ふし。長いこと煩つて

るとから、窶れと衰は看憔れてみとが、此
孫なる色にぞうとのを見と事がない。厭に
白けて、光澤がなくて、死の氣に曇ってみ
るから、病体が何處となく薄暗い。もう家
のお祖母さんでは無いやうな氣がする。と

いって、後所のお祖母さんでもないが、何
ぞか其處に落氣味の暗い區劃が出來て、此
方は明るく暖かく、向ふは落暗く冷こい
やうで、何だかつと。

「お辞儀をしないか。」

と父に催促されて、私は莞爾こゝとなつ
し。何故どか知らんが莞爾こゝとなつて、
ドサンと膝を突いて、遠方からお辞儀して、
急いで次の間へ逃げて来て、矢張
莫爾こゝしてゐた。

別の

其中に親類の人達が集まつて来る、お寺
から坊さんが来る、其映はお通夜で、翌日
は葬式と、伊どか家内が混雑するのに、親
る物聞く事此の珍らしいので、私は其に紛れ
伊と忠はなかつて
て泳ぎ[illegible]ると、疲て葬式が済ちで寺か

ら帰って来ると、手傳の人も一人帰り、二
人帰り、して跡は父家の者ばかりになる。薄暗い
ランプの陰でト面を合せて見ると、お祖母
さんが一人足りない。あゝ、お祖母さんは
先刻穴へ入ってゐつさが、もう何時迄待つ

ても帰って来ぬのだと思ふと、急に私は悲
しくなって、シクシク泣出した。
私の泣くのを見て、母も泣いた。父も到
頭泣いた。私子三人向合って、黙って暫く
泣いてゐた。

平凡

二幕一景

祖母に死別れて悲しかつたが、其頃は子供だつた時だから、十分に人間死別の悲しみを汲み分け得ずかつたその悲しみの底を割つた

と思はれるのは、其後両親に死なれた時で
ある。
去る百日に疎しとは一わたりの道理で、
私のやうな浅草の侍位は及て兄と共に死
んだ親を慕ふ心が深く、厚く、濃かにやう

やうだ。
去年の事だ。私は久板で厳重の為停留し
た。寺の在る所は田は淋しい所柳で、門
前の竿島を吹く風が悲しい往ごうたが、今
回は可なりの所迄に成て、昔程く恐

んだ事のある掛茶屋は、紙も形も無くなり、其跡がバースショップと白ペンキの看板を揚げと理髪店になってゐる。

荒れ果てゝ、門は左程傾かつたでもないが、実当りの本堂も、其側の庫裏

も、多年の風雨に曝されて、屋根瓦が落ち、

かべの骨が露はれ、屋根には名も知れぬ草が生えて、甚く淋れてゐる。私は裏口で

寺男が内職に買つてゐる櫨を四五本買つて、

井戸へ掛つて、釣瓶縄が腐つて切れさうに

なってゐるのを心配しながら、湧く水を汲
上げと。手桶片手に、塔を提げて、本堂を
グルりと廻って、後の墓地一巡して見ると、
新仏が有つと見えて、地蔵の木の下
に白張の提燈が二張りハタ〳〵と風に揺い

でゐる。流石に微かな蛍ぐらゐ、確
か彼邊じゃなと見當をつけて置いて、さて昨
夜の雨でぬかる墓場の道を、跳揚げの泥を
厭ひく、底なし下駄をひられさうになりな
がら、それでも迷はずに先祖代々の墓の前

へ出た。

祠堂金を納めてある内、僅かばかりでも

沢山の附届を怠らずかうして続けるのに、此は

まことに仏なる事！　行時掃除した事やら、墓

石は一杯に青苔が蒙して、石塔も白い流の

やうな物に蔽われ、天辺に二處三處ベット

りと白い鳥の糞が附いてある。勿論木草は

雄く積って、雑草も生えてゐるが、花立

の仏間は何處へ行つた事やら、影さへ見え

なくなつた。

私は掃除する方角もなく、之に対して暫く懐疑としてゐた。

祖母の死後数年、父母の跡を追うて此墓の下に埋つてから、飢に或墨霜を塗てゐる。墓石は戒名も消め逝る程苔蒸して黙然

として何も語らぬけれど、今来って之に対面すれば、何となく生き人と面を合せたやう感がする。懐かしい人達が未だ達者でゐる頃の事が、夫から夫と正度なく想出されて、祖母が[illegible]先に回くなって日向がッこ

をしてゐる格構、父が眼も鼻も一つにして
大きな嚏をやしとする面相、母が襷掛で
後物をしてゐる姿などが、歌迄と目の前に
浮ぶ。
そよろと風が吹いて通る。木の葉がざわ

七

ざわと騒ぐ。木の葉の騒ぐのとは思ひながら、遂おど耳には、嚏笑えのあと飲吸れた
鼻や、快活な高笑や、低い話声が
絡み合つて、何やら慌しく切に訴してゐるやうに思はれる。
一走りして襟と共が止む

と、跡は寂然とする。

と、私の心寂然とする。その寂然とな

つと心の底から、ふと恋しいが勃々と湧いて出て、我知らず泪含ひど。あゝ、成らう

まさらう、此儘此墓の下へ入って、もう

浮世は戻へり度ないと思つた。

平凡一九

二葉亭

先刻旧友の一人が訪ねて来た。此人は今でも文壇に位置を置いてる人で、人の面さへ見れば、君ねえ、ナチュラリーズムがねえ

と、グヅリしと炊めこ人だ。

神経衰弱を禁樽してる人だから面らない。

来ると、ニチャしと飯を食ってるやう

な辯で、直ぐと自分の噂を炊める。やあ、

僕の理想は多角形で出澤がちるの、やあ、僕

の神経は鋭の塊に尖がって来さから、是で

一つ神秘の門を突いて見る積どのと、其

様なことを柳亭がり言ふ。でなきゃ、文壇の草

全盛

人の言葉に修羅を燃し、何かしらケチを付

けがつて、君、仕事のと、近次評判の作

家の名を言って、姦通一件を聞いとかとい
ふ。すると、はきつと、
（うんざりしながら、いや、そんな事僕は知らんと、ぶつきらぼうに
言ふけれど、文士だから人の腹なんぞは分
らない。人が知らんといふのにあて調子づ

いて、秘密の元どよ、此場限りどよと、私
が十人目の愛手かも知れぬ癖に、悪念を推し
て、此の仇花が友の仇花の妻と姦通してゐ
る話を始める。仇とかぐ知仇とかして、掃
溜の隅でせいぜとかしてゐる處を、大に吠ば

かれて苦くなるて逃げしとか、何とか、そ
の醜穢なること到底筆には上せらかぬ。そ
れも唯其夫の話で、夫どから何といふ事
も無い。君、モーパッサンの捉まへ方など
ね、といふ位が落じ。

これで最う帰るかと思ふと、なかく以
て！　君ねえ、僕は此えと、やと僕の事にな
つて、其中に世間の俗物共を暗中に搭かな
いで、一つ思ふ存分な所を書いて見やると
思ふといふ様な事を僕云つて、文士で一生

貧乏暮しをするのどもの、ねえ、君、責て徇世みでも
名を残さぬきやつと、惜らない事をいふ。
りしと燻るやうな気焔を吐いて、散
々人を飲がらせた挙句に、僕は君に萬解の
因情を寄せてゐる、今日は一つ忠告を試み

やうと思ふといふから、何を言ふかと思ふ
と、「君も然う所帯染みてりはずと、一つ奮
発して、何か徇世へ残し玉へ。」
こんなのは文壇でも流石に居の方でおら
う。去かし不幸にして彼の友人は大抵居むか

りど。こんな人の、こんな風袋ばかり大き
くても、割れば中から鉛の天神様が出て来
るがうなのやうな、見掛倒しの、内容に
乏しい、信用なる忠告ぶんでは、私は些とも
疑ひを容れない。私の頭は祝の口から今一度、

薄暮して此邪をお引きでない、お腹が減い
たら御飯にせうかと、誘らん、降らん、意
味の無い事を聞きこいのだが。

三ツ

その親達は最う世に在ない。若し未だ
生きてゐたら、私は孝行をしたい時に

三ツ二度目

は親はなしと、又してもの物は旨い事を言ふ。あれ嬉しいにつけ、悲しいにつけ、感出すのは親の事ばかりそれみポチの事だ。

三

平凡（十）

二葉亭

ポチは言わば忠なく犬だ。

来年は四十ごといふ、元旦に大分の年に親仁の私が白髪を見える、汚ない髭の中に

親に続いでは犬の事を[illegible]を惜しまと、保
り馬鹿氣てゐてお話にならぬ――も、神仰
る人が有るかも知れんが、私に取っては、
ポチは犬だが犬以上だ。犬以上で、一寸、
まあ、弟[illegible]
（何と言つてよいのかな、）
（でもない、弟以上だ。）

さうだ、命だ、命の命だ。恥を言はねば理が聞こえぬといふから、私は理を聞かせる為に、敢て恥を言へば、ポチは私の初命であつた。其癖初めを言へば、欲しくて貰つた犬ではない、止むことを得ずといや、

別行

あれが矢張天から授かつた[illegible]と云ふのかも知れぬ。

忘れもせぬ、祖母の亡なつた翌々年の、春雨の去とした降る薄ら寒い或夜の事であつた。宵惑の私は例の通り宵のうから寝てりつて、いつ両親は寝に就いた事やら、

一向知らずねつたが、ふと目を覚すと、あの明かり枕元を朦朧と照して、四囲は微暗く寂然として、耳元近くに幼な子がすすり泣をしてゐる中で、

ゴうといふかと忘れば、スうと、或は高く、或は低く、単調ながら拍子を取つて、

突然大鉈で大丸太を横割るやうな音がした。

何どもらうと思つて耳を澄してゐると、時々

あなどる音が自分と自分の單調に飽いたやうに、

忽ち狂乱とやり慣れた調子を破り、

凄じい、障子の紙の共鳴りのする

十八番 [illegible]

を立て、勢込んで何處へか行きさうにしも、

程の音[illegible]忽ち物に行當つたやうに、

當と止む。と、之ばらく閑寂となる一そ

の側から、直ぐ又稽かにスラ〳〵といふ音が遠く

方に聞え出して、其が次第に近くなり、荒

くやすり、又耳元で極氣よくゴウ、スウ、ゴ

ウ、スウと鳴る。

やはり私は夜中に滅多に目を覚した事が無いから、はじめは甚く吃驚したが、能く研究して見ると、なに、父の鼾なので、漸と安心して、其儘再び眠らうとしたが、止なくウ〜ス

ウ〜が耳に附いて中々眠れない。仕方がないから、聞える儘に其言に傾入てゐると、思做しで種々に聞える。或は遠雷のやうに聞え、或は浪の音のやうでもあり、又は火吹達磨が火を吹いてゐるやうにも聞

思出

れば、ゴロタ道を荷馬車が通る音のやうに
も思はれる。と、ふと畫間見た繪本の天狗
が酒宴を開いてゐる所を憶出して、阿爺さ
んが天狗にさうてお囃子を行つてるのぢや
ないかと思ふと、急に[illegible]
[illegible]くなつて

十八番 [illegible]

来て、私は頭からスポッと夜着を冠つて小
さくなつた。けれども、天狗のお囃子は直
著の襟から潜り込んで来て、耳元に纏りは
いて離れない。私は遂越と回くなつて共に
耳を塞いでみると、何時からとなくお囃子

の手が被布で来て、今の手に遠くで遠かに
キャンしといふやうな音が聞える。ゴウ
といふ凄じい音の時には、それに消壓され
て聞えぬが、スウといふ溜息のやうな音に
なると、其が判然と手に取るやうに聞える。

不思議に思って益し耳を澄してゐると、今
の手のキャンしが次第に大きく、高くな
って、遂には鮮の中を脱出し、其とは離れ
ばなれに、確に門前に聞える。
かうなって見ると、[読むまでもなく]小犬の啼聲

じ。時々咽喉でも締られるやうに、消

況しく喧々と騒立てる其騒亂が、癒てかば

そく悲し氣にかすれて、滅入るやうに遠い

遠へ消えて行く――かとすれば、忽ち又近

くで塔へ叩れぬやゝに騒出して、クン

と鼻を鳴すやうな時もあり、ギャオと欠び

をするやうな時もある。

じゝ大が時々ものどを

平凡

（十一）

二葉亭

私は元来動物好きで、就中犬は大好じか
ら、近所の犬は大抵馴染じ。サルども、此
れ程かわゆい可愛げな身で泣くのは一足も無い

から、不思議に思つて、
笑ひながら、[illegible]
寝と夜着の中から首を出すと、
「めいしとのて、[illegible]ないのかえ？」

別行

別行

と、母が寝ぬりを折つて此方を向いた。
私は此迄笑は[illegible]いて、
「あれは白ぢやない[illegible]いねえ、阿母さん？」
と小さい狗の[illegible]ねえ？
「何しこんぢら
うて」

「棄狗さ。」

「棄狗ッて何？」

「棄狗ッてさ誰かゞ棄てッしめさ。」

私は支ばらくゐへて、

「誰が棄てッさンざらう？」

「大方何處かさ何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄てッしと、私は二三度反覆して見たが、分らない。

「何して棄てッしンざらう？」

芝居よゝなどといふ母ではない。何處迄

相手になって、其意味を説明して云れて、
もう喰いから黙つてお寝と、優しく言って又彼方向いてゐつた。
私は衣服を被つた。犬は門前を去つしのか、喘息が稍遠くなる。
に隨れて、

犬の鼾が平にはつく。寝られぬ
僅に、私は衣服の中で今弱いと世の説明を
又寝しし味つて見た。まづ何處かの飼犬
が樹の下で呪を生んだとする。小ぼ
けなむくしとのが、童ら会って首を

持げて、ミイしと乳房を探してみる、所へ親

犬が其側ドサりと横に倒り、片端から抱

へこんでベロ〳〵舐ると、小口から舌の先

で他愛ないくコロ〳〵と精がされる。精が

されては大騒して起返り、又ヨチ〳〵と這

寄って、ポッチりと黒い鼻面でお腹を探り

廻り、側く思ふ乳首を探り當て、狂ひて吸ひ付いて、

小さな手で揉立て〳〵吸ふと、

甘い温かな乳汁が滾々と出て来て、咽喉へ流

込み、胸を下つて、何とも言へずお甘しい。

と、脇の下から、まゝ乳首に唇はかぬ久弟が鼻面で割込むで来る。

奪ひまいとして、毛の生えた脇を突張り大袈裟行つてみるが、到頭奪ひ

て、又背広らを守ねて、他の乳首に吸ひ付く。

十ノ巻 飯島

其中にお腹も満くなり、親の肌で、

寝けさうな好い心持になり、不覚

と眠くなると、含まれた乳首が脱けさうになる。

夢心地にも狼狽て又吸付いて、一志きり吸

立てるが、

直ぐ他愛なく昏々とな

身体も溶ける

つて、乳首が口を脱ける。脱けて乳にならず

に[illegible]口を削いて、小さな舌を出し[illegible]こちらで、

一向正体[illegible]がない…甚暗忽ち暗黒から、茸々と

一字の十

もの生えと、節くれ立つと、大きな腕ぐヌ

ッと出て、正体なく寝入つてゐる所を無手

十ノ巻 鼠退治

と引掴み、宙に釣す。驚いて目をポツチり

吸き、いといげ[illegible]な降で悲鳴を揚げながら、四足を張

つて藻搦く中に、頭から行かで包まれさや

うで、二晴になる。窒息で息が塞りさう

だから、必やうと[illegible]が、出られない。久

らく藻搭いて居る中に、ふと足搭が自由に
なる。と、欲えんを撮まれて、高い〳〵所か
らドサリと落された。うろ〳〵として其處
らを初迴すけれど、何ごか変な淋しい眞暗
な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、

雨に濡れて、見る間に濡えよばとれ
なる。身慄ひ一つして、クシ〳〵と欠を呼
んで見るが、何處からも出て来ない。遠方
に落れて、ヨチ〳〵と這出し、雨の夜中を
唯一人、温かな欠の紀房を慕つて必し氣に

嘉兵衛は暫く考へ、先刻一度門前へ来て、又何度へか徒歩つて行つたやうぢつとが、其が何時かお庭つて来て、何度を如何潜りとんぢのか、今は忘しく玄関先に聞える。

嘉兵衛が

十八

平凡

十二

二葉亭

「阿母さん、門の中へ入つて来たやうぢよ。」

「おゝ、私が行だかを居らないやうな気にな

つて又母に言掛けると、母は氣の無さ
こえ
う降で、

「さうどねえ。」

「で見やうか？」

「で見なつでもよいよ。寒いぢでもないか

十八中 [illegible]

二

別行

ね。」

「だつてえ、あら、彼れに喋いてる……」

なりかりこえ
折柄絶入るやうに喋る物の陰に、私は我
しらず慌然起上つたが、何だか一人では
怕いやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行って見やうよう！」

「本當に仕方がない兒ぢみえ。」

と、口小言を言ひし、世も漸く起きて、

雪洞を點けて起こつさふらハ私も其後に隨いて、玄関―と云ってもッイ次の間ぢが、

玄関へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、

がらりと雨戸を繰ると、風と夜風が吹込んで、雪洞の火がチうしと靡く。其時小さな鞠のやうな物が御と軒下を飛迯

やうだ

いた[illegible]が、[illegible]て雪洞の火

先が立直つて、一道の光がサッと戸外の暗

黒を破り、[illegible]雨水の[illegible]に溜つと

[illegible]雨に濡れた地面を細

長く照出した所を見ると、其處に生後十ヶ月[illegible]

[illegible]迄とめ、むく〳〵と肥つと赤ちやけ

た狗兒が、小指程の尻尾を千切れさうに振立

つて、此方を眺上げてゐる。形體は私が寢

てゐて想像したよりも大きかつたが、果し

て全身雨に濡れて泥どろけになり、

だらりと[illegible]無れ

ルと割合に大きい耳から雫を滴

し、ぱっちりとした両つの眼を青貝のやう
に列べて光らせてゐる。

「おやく、まあ、可愛らしい！」と、母
もついい不覚言ってしまった。

次や私は犬好だ。凝として視てゐられ

ないの。母の袖の下から首を出して、
チョッ〳〵と呼んで見ると。
と、左程嬉れと様子もなく、チョコ〳〵
と側へ来て、流石に少し辛べったくいちりな
がら、頭を撫でゝやる私の手を、下からジ

イく〳〵と推上げるやうにして、べロ〳〵と
舐廻し、手を吳れる積りのか、頻に回い前
足を擡げてバタ〳〵やつてゐるが、果は和
りと痛まぬ程に小指を咬む。
私は可愛くて〳〵堪らない。母の面を瞰

上げながら、少し鼻孔を出し掛けて
「阿母さん、何か遣つて。」
「遣るし好いけど、居ないてうふと、仕方
がないねえ。」
と、口では拒むやうな事を言ひながら、

それでも
どいどころい
茶碗へ行つて、鉢茶碗に冷飯を盛つて、何に
かけぎやん
かの汁を掛けて来て呉れた。
早速箸脱へ引ひきくつぬぎこれ
ちよつとかは一寸香を嗅いで、直ぐ甘さうに先づピチ
ちくしたが、汁が鼻孔へ入ると見
ヤ〳〵と舐出しめだ

七

えて、時々シシン〳〵と小さな嚏をする。
ちましくしんどめしかな
忽ち汁を舐盡して、今度は飯に掛つて仕
あらきやだなこごとこしきいこ
に皇小兄弟も無いのに、切に小言を言ひな
がら、がワ〳〵と喫べ出しとめしまだ
がら、飯はまだ
くびかくはあごひつつ
食慣れぬかして、兎角上顎に引ぱく。首を

捧ってんるが、其様な事では中々吸ハない。

果は為方

で口の端を引捲くやうな真似をして、大

藻捲きに藻捲く。

此際に私は母と談判を始め、今晩一晩

泊めて遣つてと、

十八番

一寸渋つたが、もう駄うやうでは仕方がな

い。阿爺さんに叱られるけれどと言ひながら、詰り桜徒法師を捜して来て袋脱の隅に

敷いて遣つた。はなかつたが、

私は此こともし知らなんじが、

其晩一晩帝通されて、

お茶げは

父に小言を言へはいこと言ふな。